

市民研会員から寄せられた

2021 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2022 年 1 月 31 日、到着順に掲載

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ 3 作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画や TV 番組、聴いた CD や足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい 3 作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007 年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただきます。

●杉野実

1◆徳田雄洋『必勝法の数学』（岩波科学ライブラリー）

蛭川浩平『セイバーメトリクス入門』（水曜社）

将棋と野球、全然性質のちがうものだと思いますが、どちらも若い人の活躍で近年もりあがってますよね。将棋をふくむ論理的なゲームを論じた前者は、「同一局面の再現のない、役割区別なしの、どんな交互型 2 人ゲーム G もあるサイズ k の 1 山くずしゲームと等価になる」という、おどろくべき「等価」定理をのべます。まあ論理をつきつめたらそうなるのでしょうが、少し複雑なゲームを実際に「つきつめる」のは、人間には勿論、人工知能にも（「厳密に解く」のは）無理ということでしょうね。統計的手法を用いて野球を「科学する」セイバーメトリクスは、計量経済学が全然「当たらない」のにくらべると、これまたおどろくべき成果をあげています。まあ野球はルールも厳密に決まっているし、要求される身体活動も「型にはまっている」から、「なんでもあり」の経済にくらべて「科学的に」あつかいやすいのでしょう。でも「バントは有効な戦術ではないが、だからこそあえてバントで守備側の裏をかくこともできる」のは、マクロ経済学と似ているかも。

2◆マイケル・サンデルほか『サンデル教授、中国哲学に会う』（早川書房）

直接には儒教と老荘思想をあつかっていますが、あのサンデル教授がかかわるからには、ただの訓詁注釈になるはずがありません。まして本書では「アメリカと中国の研究者が論考をよせている」わけですからね、「現代世界を支配する二大国の対決」じみたところがどうしてもでてきます。そうはいつでもそこは名高きコミュニタリアンたるサンデル、「権威主義」と一刀両断にされがちな中国の伝統思想に、リベタリアン的な社会像をこえる可能性をどうにかしてさがそうとします。たとえばプラトンの哲人政

治が、あくまでも為政者個人の人格だけを問題にするのに対して、儒教は「為政者が手本を示すことにより、人民もまた教化される」ことをめざす。老荘思想は、「足ることを知った人々が、道徳をもこえた、真に自由で平和な社会を実現する」ととく…。なんだかあやうい、やっぱり中国にとりこまれているのでは、と疑問をもつ方も多いことでしょう。でも「力の対決より思想の対話」という姿勢から、学べるところも少なくないと思います。

3◆築地本願寺倶楽部の

「仏教ワークショップ—最近あった嬉しかったこと・悲しかったこと」と「よろず僧談」

この話をするにはまず、地元市川でカフェを開いている私の友人が、いわゆる「コロナ鬱」なのかどうか、とにかくひどく落ち込んでしまっていたことを、まず話さなければなりません。浄土真宗の信徒団体にはずっとご無沙汰していたのですが、「ワークショップ」ではオンラインで、「よろず僧談」では直接対面で、それぞれお坊さんとお話しできるときいて、ふたつとも参加してみることにしました。さすがお坊さん！といたくなるような、すっきりしたお答え…はなかったですね、はっきりいって。若い坊さんは「カフェのもよおしもオンラインでガンガンいけ」というし、一方中年の坊さんは「直接対面できる喜びを、おたがい味わえるまでもう少しまで」というし…。でもそこがいいのです、「坊さんたちが一緒にジタバタしてくれた」ことがありがたくて。…でいま、カフェはどうなっているか、ですか？ボツボツ再開した店をたずねて駅弁の話をしたら、それが「オリジナル弁当を作って食べる会」につながるのか、意外なところから動きだしています。

●吉岡寛二

1◆「雑の思想」（高橋源一郎+辻信一共著、2018/11/15、大槻書店）

この本は、3年前に出版されたときにすぐに購入して読んでいたのですが、内容が豊富すぎて消化不良でした。昨年12月に再読したのですが、約3年経過する間に私自身の知識が増えたこと、そして考え方が進化したことが大きいのか、こんなにいいことがたくさん書いてあったのかと感心しました。「なるほど。そういう考え方もあるね。」というような興味深いことをたくさん発見できますが、「そうだったか！」と特に気に入った部分を二つ紹介します。

一つは、「雑」という言葉に抱くイメージのことです。現代では、「雑」というのは「主要でないこと」「有用でないもの」「いりまじっていること」など、否定的なイメージをもつと思います。しかし、大昔はそうではなかったようで、万葉集は「雑」から始まっているそうです。「雑」というのは「全体的な混沌としている状態」「美しきカオス」という見方があるとのこと。

もう一つは、西洋近代科学も資本主義も共産主義も「キリスト教」と相性がいいのですが、著者たちは、「民主主義」は「雑そのもの」だという考え方をされています。その意見に関しては、大賛成です。日本の民主主義が欧米諸国と比べると未発達だという意見の方が複数おられますが、本当にそうでしょうか。キリスト教・西洋近代科学が発達した「欧米型民主主義」と比較した場合には、「日本型民主主義」

がかなり異なった発展をしてきたことは事実だと思います。

南方熊楠、宮沢賢治、ガイヤ仮説なども話題にされていて、とても楽しく読めました。

2◆『日本』ってどんな国？(本田由紀著、2021/10/10、ちくまプリカー新書)

以前に書いたことがあります。他国民・他民族と比較をしている日本人論が大好きです。しかしながら、今までに読んだものは、①外国に住んでいる一般人が実感して書いたもの②日本に住んでいる人が思考して書いたものが多かったと思うのですが、「客観的データ」に基づいて、考察したものは全くありませんでした。著者の本田由紀氏は社会学者ということもあって、③諸外国と具体的なデータ比較をすることで日本人／日本人社会を考察しています。

「具体的データ」といっても「アンケート結果」などですから、いろいろな要因での偏りがあります。さらにその解釈は、かなり主観的なものになっているといえるでしょう。調査データに基づいて「日本を考察する」という、著者のやり方・姿勢には大賛成！ とはいっても、イデオロギーの違いが大きいので著者の結論には同意できない部分も多いです。

考察した結果の賛否はともかく、しっかりとしたデータに基づいて考察していますので、一読の価値は十分にあります。

3◆「カブラの冬」(藤原辰史著、2011/1/20、人文書院)

昨年のおすすめ3作品に、藤原辰史氏の著書「分解の哲学」を紹介しました。今回紹介する「カブラの冬」は、第一次世界大戦でドイツが敗戦に至った経緯を、過去の資料による歴史的事実をもとに考察したものです。第一次世界大戦の敗戦体験が、ナチスの台頭とナチスによるユダヤ人迫害につながったことについても触れています。

藤原氏は、近現代史の歴史学者ですが、「食と農」を切り口としているという特徴がありますので、市民研としても共通点を見いだせるかもしれません。

日本帝国主義により敗戦に至った戦争は「(満州事変以降の)十五年戦争」とも言われています。しかし、それは戦勝国側が自分たちの正当性を主張するために、(満州事変により国際連盟脱退に至った)日本の不当性を強調しているからだと思います。日本の歴史からみれば、満州事変というのは、日露戦争結果による満州権益のこと、さらには第一次世界大戦において(欧米の依頼に基づき)シベリア出兵したこと、そして(欧米と異なって)シベリア戦線からなかなか撤兵しなかったこと、などが延々と続いてきたことの結果だったとみなすこともできると思います。

ヨーロッパは地理的に遠いし、米国と違って歴史も長く、人種・民族・国家が入り組んでいることから、西洋近代史全体を理解するのは非常に難しいと感じていたのですが、全体の流れを知るヒントになった本があります。日本をどう見ているのかということも参考になりました。(高額なのでおすすめではありません。)

世界の教科書シリーズ43 「ドイツ・フランス共通歴史教科書【近現代史】—ウィーン会議から1945年までのヨーロッパと世界—」(2016/2/29、明石書店)

●倉本 宣

今年は仕事量の波が大きく、体調もそれに引きずられて変動の大きい一年でした。改善した状態で年の瀬を迎えられるのは、「動物の絵」のおかげです。

1◆府中市美術館（金子信久・音ゆみ子）(2021)動物の絵 日本とヨーロッパ ふしぎ・かわいい・へそまがり 講談社（府中市美術館開館 20 周年記念 動物の絵 日本とヨーロッパ ふしぎ・かわいい・へそまがり の展示の図書）

亡くなった妹が遺してくれたものに、我々夫婦のあだ名がある。それが、ネコとイヌの名前なので、ほとんどないネコの迷惑看板はあきらめて、イヌの迷惑看板を撮影して収集してきた。迷惑というのは、糞、尿、放し飼いやなどである。50枚あまりの迷惑看板を集めたところだったので、この「動物の絵」の視点は整理に役立った。動物観研究会で発表したところ、景観を壊すこのような看板自体が迷惑な存在であるという意見があった。これも日本的な社会の象徴なのかもしれないと感じた。展示と図書は、絵心を欠く私には目からうろこで、図書をくりかえし眺めている。

2◆岸由二(2021)生きのびるための流域思考 ちくまプリマー新書

地域の生物多様性を保全する手法には、流域を重視する立場と、エコロジカルネットワーク（生きものの移動経路になる自然のつながり）を重視する立場がある。前者を代表する岸さんの鶴見川流域での実績を踏まえたわかりやすく説得力のある著書である。他方、エコロジカルネットワークとして機能するものには、河川、崖線、水路、街路樹の豊かな道路、緑道などがあり、多くの自治体の生物多様性地域戦略ではエコロジカルネットワークの整備がうたわれている。1年生にランドスケープエコロジーについて私が話す時には、流域の中にどんなエコロジカルネットワークがあるのか探してみることにしている。

3◆須黒達巳(2021)図鑑を見ても名前がわからないのはなぜか？ 生きものの“同定”でつまづく理由を考えてみる ペレ出版

市民研が自然保護に進出するためには避けて通れない課題に生きものの同定がある。著者はハエトリグモを研究している小学校の先生で、昆虫、クモ、シダを中心に、具体的で説得力のある事例を示して同定の困難さを通じて、おもしろさを伝えている。「形を見分ける目ができる」と「目をつくる」ことが、私には「目ができていない」分類群に照らして考えるとまさにそのとおりだったので、終盤の同定が困難な分類群についての記載にも引き込まれてしまった。最近の若者は、画像を検索して、種名らしきものを書きだしてくる。生きものには変異があるので、同じ種であっても形態が異なる場合もある。この本では、ヤマグワの葉の形の変異が掲載されていた。市民研において「目」を持つ方が多くなるための企画が望まれる。

●上村光弘

1◆宮部みゆき（1996）『蒲生邸事件』毎日新聞社（私が読んだのは文庫版、文春文庫、2000年）

2020年に読んだのは30冊で、2019年より20冊少なくなった。それはメモを多くとるようになったこともある。その中で一番考えさせられたのは、宮部みゆき『蒲生邸事件』。2.26事件を題材に扱ったSFだ。本書の内容について、アマゾンに掲載されていた内容（もともとは「BOOK」データベース）を以下から引用する。

「この国はいちど滅びるのだ—長文の遺書を残し、陸軍大将・蒲生憲之が自決を遂げたその日、時の扉は開かれた。雪の降りしきる帝都へ、軍靴の音が響く二・二六事件のただなかへ、ひそかに降り立った時間旅行者。なぜ彼は“この場所”へ現れたのか。歴史を変えることはできるのか。戦争への道を転がり始めた“運命の4日間”を舞台に展開する、極上の宮部ミステリー。」

<https://www.amazon.co.jp/%E8%92%B2%E7%94%9F%E9%82%B8%E4%BA%8B%E4%BB%B6-%E5%AE%AE%E9%83%A8-%E3%81%BF%E3%82%86%E3%81%8D/dp/4620105511>

ネタばれになるので詳しく書くことができないが、時間旅行をして未来を知った蒲生憲之大将は、まず現状を変えようと画策した。しかし、それができなかつたため、今度は未来に自分の死後の名誉を守るため、ある文書を遺した。その文書が公開されたら、蒲生憲之大将は確実に歴史に名を残す英雄になる。

それを子どもである貴之さんは「（あの文書は）汚い抜け駆けの集大成」と断言するも、「父の抜け駆けを盾にして、旧軍人と軍人社会への風当たりの強い時代を生き抜こうと思うほどの臆病者のままだったら、父の文書を世に出すよ。だが、もしも少しでも僕が変わっていたら、あの文書を闇に葬るだろう。父の死後の名誉も消えてなくなる」といていた（pp.609-610）。結果、その文書は葬られた。自殺してまで自分の名誉に固執した親の意見に従わなかった。公開して歴史が変わったら、貴之さん自身の利益になったのかもしれないが、そうしなかった。歴史を曲げなかった。そこがすごい。もし自分が貴之さんの立場だったらどうしただろうか？

2◆丹野智文、奥野修司（2017）『笑顔で生きる』文藝春秋

39歳で若年性アルツハイマーを発症したセールスマンの丹野さんが、家族や職場の同僚・上司に支えられて、病気とともに暮らす日常を、ノンフィクション作家の奥野さんが構成してまとめている。家族や職場の協力、自助技術（とくにスマホ）の活用で、右半身片麻痺で高次脳機能障害をもつ僕も、ひとりでもできることがあると、ヒントをいっぱいもらった。

3◆頭木弘樹（2020）『食べることと出すこと』医学書院（シリーズ ケアをひらく）

20歳で潰瘍性大腸炎という難病になった著者が、発症から13年間の闘病生活をふりかえる。一番激変したのが食事と排泄。食事と排泄があらゆるとっていいほどの苦しみになる。また、病院での医師、看護師、入院患者とのやりとりも言語を絶するものがある。たとえば、病院のトイレでもらってしまったら、若い看護師からバケツと雑巾をわたされ自分で始末されるように命じられる。

その著者が救われたのがカフカを読むことだった。文学の中に描かれる絶望の数々を読むことで、かろうじて精神を保っていたのかという印象をもった。

本書の文章はユーモラスで、読みやすい。同じ病気を患ってもひとりひとり症状が異なるため、共感できない場合もあるという。ましてや病気を患っていない者が想像するのは大変むずかしい。しかし、自分だったらどう感じただろうか。考えさせられた。

●角田季美枝

1◆石牟礼道子、鶴見和子（2002）『言葉果つるところ』（〈鶴見和子・対話まんだら〉石牟礼道子の巻）藤原書店

2021年はなぜか気がつくると石牟礼道子さん（1927-2008）の対談本を読んでいた（田中優子、伊藤比呂美、志村ふくみ、池澤夏樹など）。それぞれ目から鱗の内容だが、私がいまだに一番読み直しているのは、社会学者の鶴見和子さん（1918-2006）との対話である本書。

鶴見和子さんは「近代化の再検討」というテーマを内外の社会学の理論や実践によって追究し、内発的発展論を独自に展開していた。その過程で水俣に通り、「アニミズム」という水脈にたどりついたように感じている。しかし、77歳で脳卒中に倒れて以降は、身体でそれをつかんだのではないか。倒れて以降の著作では、それまでの思索が論文という形ではなく、歌や対談を通じて研んでいるような印象がある。本書での以下の語りが象徴的だ。

「倒れてから私はもう少し水俣に近づけたように思う。水俣の痛苦を我が身にいささか引き受けるという形になったから。私は自業自得でこんな病気になった。水俣の人たちはなんにも罪がないのに他人からやられたんだから、どんなに悔しかっただろうと思う。水俣では、病気が向こうからやって来た。私は自分で自分に暴力振るったんだからね。自然に反することを自分に対してやった、それはしょうがないわよ。だけどこうなったためにいくらかつながるかなあって感じなの。」（pp.135-136）

本書は、鶴見さんの晩年の対談シリーズ「対話まんだら」の第1巻である。独自のアニミズム論といながら、世界のどの地（国家ではない）にもあるアニミズムを射程に入れていた。まだうまく言葉にならないもやもやが石牟礼さんとの対話で霧が晴れていったようなやりとりが随所にある。「この対談は貴重であった。アニミズムについて、その原点がはっきりしたことである。」（p.308）と、あとがきでいきっている。残念ながら、それをさらに言葉に昇華することなく逝かれてしまった。

本書では、石牟礼さんは鶴見さんを和子先生と呼び、自身の文学や水俣の運動に対して非常に率直に語っている。

ちなみに、本書巻末のインタビューで石牟礼さんは鶴見さんのイメージを以下のように語っている。「なんていうか、空と海のあわいからただよってくる白い蓮華というか、そういう感じですね。その蓮、古典的な花びらの中に、強い生命を持った精霊がかがんでいて舞い立つような気配なんですよ。」（pp.300-301）。

本書のおすすめ理由をなかなか的確な言葉にできないので、非常に歯がゆい。しかし、近代化の再検討という大課題に対して確実にひとつの方向を示してくれるとの確信がある。ひきつづき本書や鶴見さ

ん、石牟礼さんの著作を読み込んでいきたい。

2◆藤原辰史 (2019)『食べるとはどういうことか 世界の見方が変わる三つの質問』農山漁村文化協会

著者の藤原さんは農業史の研究者で、農業、食文化に関連する近代史に関する著作を数々出されており、評者は知的刺激を受けている。最近、この領域の研究者ではなくても、コロナ禍での発言（たとえば、岩波書店のウェブサイトでの「パンデミックを生きる指針：歴史研究のアプローチ」更新日：2020年11月18日。<https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic>）で共感を得ている読者が増えているだろう。

本書は、中高生8人と藤原さんの座談会の記録である。座談会の主催者は首都圏の生活協同組合の連合体であるパルシステムと農山漁村文化協会。出席した中高生は、パルシステムの組合員・職員の子どもから応募で選ばれた。ということでは、母数がやや偏っている。たとえば、トマトの種を自分で採って（品種改良して）育てている15歳、家の畑になっているキュウリに味噌をつけて食べるのが今まで食べて一番おいしかったという14歳は、あまり首都圏では一般的ではないだろう。

私も以前書いたことがあるし、ふだん学生にも話しているが、「子ども向けに専門的な内容の本を書くことができるのは非常に優れた人しかできません」。専門用語も使えない、言い回しも平易でなければ伝わらない。本書はそれが対話の形で書かれ、さらに紙の本というメディアを活かした「解説」や「コラム」「アフタートーク」が付けられている。その意味で、本書は藤原さんの思考の中核がわかる本でもある。

座談会は以下の3つの質問を取り上げる。「①いままで食べたもので一番おいしかったものは？」「②『食べる』とはどこまで『食べる』なのか？」「③『食べる』ことはこれからどうなるのか？」。この質問の順で、途中昼食をはさみ、3時間のトークが繰り広げられる。

ちなみにこの3つの質問はこの座談会で初めて出したものではなく、藤原さんが大学で食の歴史を話す講義で最初に学生に対して15分アンケートで問いかけているものだ（今までの学生の回答も本書ではまとめて紹介されている）。

最初に様子見に来る大学生と違って、この座談会では同調したコメントがほとんどない。それを藤原さんがおもしろがって、さらにいろいろと間口を広げたり、深掘りする問いをしていて、どんどん熱が上がっていく。

とくに②の問いの広げ方・深め方が藤原氏の引き出しの豊かさを反映していて、とても読み度がある。「食べる」とはどういうことか、というのは、すぐ答えを出すことができない、非常にむずかしい問いである。実は私の大学の卒論は「化学調味料の文化史」で、まさに最後はこの問いになってしまったので、すごく収束させるのに手を焼いた。提出の時間も迫っていたので、最後はなぜ人間の欲望はほかの生きものとはちがうのかということになり、無理やり仏教などの教えで収束させてしまった。いまだにこの問いは大学の講義のテーマのひとつである。

ページ数やサイズは小さいが、はまったらどんどん引き込まれる力をもつ本である。

3◆室橋裕和（2020）『ルポ新大久保 移民最前線を歩く』辰巳出版

私が出講している和光大学はアジア研究にかかわっている教員（常勤、非常勤とも）が多いので「アジア・フェスタ」という取り組みを13年間やっている。アジアの文化（食べもの、踊り、音楽、演武、服飾など）を楽しむことができるイベントだ。私も屋台出店に協力していた。それがコロナ禍で2019年は中止となってしまった。2020年は復活を図りオンラインでできる講座を実施した。そのひとつが本書の著者のトークイベントである。

残念ながら私は日程が合わず参加がかなわなかったが、たまたま本書を先に読んでいたつれあいに参加できて「おもしろかった～」といていた。オンライン参加者の希望もあり、実際に体験してみようと後追い企画が企画され、本書の著者による新大久保歩きもそのひとつ。著者がガイドしてくれる街歩きはとてもおもしろいに決まっている。なので、本書をひもといてみた。

著者が新大久保に住んだいきさつ、新大久保という地名の由来、新大久保の江戸時代からの歴史、コリアンタウンになったいきさつ、いまやコリアンタウンとはいえないエスニックタウンであること、もともと新大久保に住んでいて商いをしている人たち、教会のロック牧師などなど…歩かなくても新大久保の空気を現在に限らずよく感じることができるルポである。コロナ禍の新大久保の状況にも筆が運ばれている。巻頭にガイドマップもついているので、そのうちこの地図を拡大コピーして歩いてみようと思っている。

しかし、昨今のオミクロン株の拡大感染で新大久保歩きは延期になってしまった。私（とつれあい）が新大久保を歩くのが先になってしまうかもしれないが、「歩く・見る・聞く」してみたい。

●林 浩二

今年も企画展示3点を挙げます。

全世界の博物館・美術館は2021年もCovid-19に翻弄されました。遠出は限られ、住んでいる千葉県から東京に行くことははかれる時期もあって見に行けたのは65の館・展示でした。

1◆M式「海の幸」

タイトル：ジャム・セッション 石橋財団コレクションx森村泰昌 M式「海の幸」－森村泰昌 ワタシガタリの神話

https://www.artizon.museum/exhibition_sp/mshiki/

（特設サイトは2022年4月11日まで）

会場：石橋財団アーティゾン美術館（東京都中央区）

<https://www.artizon.museum>

会期：2021年10月2日（土）～2022年1月10日（月・祝）

学校教科書に掲載された青木繁「海の幸」に記憶のある方も少なくないかと思います。石橋財団／アーティゾン美術館はこの「海の幸」をはじめ複数の青木繁作品を所蔵しています。

森村泰昌はゴッホの自画像の再現写真（1985）以来、西洋美術・日本美術の「名作」や女優を自らがモデルとなって写真で再現・表現することを試みてきました。Covid-19下、スタジオ・アトリエに籠も

り、ほぼすべて一人で着替え・収録を行ったとのこと。

この企画は、青木繁と「海の幸」を素材に、青木繁に迫り、海の幸を徹底的に研究した上で変装（変奏）した10点を制作；その経過をジオラマ模型、スケッチ等と共に展示。最後に18分半の動画で、早世した青木繁に関西弁で呼びかけます。

これまでに見た森村作品以上に、対象の作家・作品に肉薄し、解釈・表現した作品による展示と思えます。

森村の作品例については自身のサイト

「森村泰昌」芸術研究所 <http://www.morimura-ya.com/>
の「作品紹介」で見ることができます。

アーティゾン美術館については、2020年のわたしのおすすめ3作品でも取り上げました。事前予約が必要です。

2◆福田美蘭展

<https://www.ccma-net.jp/exhibitions/special/21-10-2-12-19/>

会場：千葉市美術館（千葉県千葉市中央区）

<https://www.ccma-net.jp/>

会期：2021年10月2日（土）～2021年12月19日（日）

千葉市美術館のコレクションのうち、有名な作品を選んで、直接に呼応して制作した作品を中心とした展覧会。大部分はここ数年の制作で、東京2020（オリ・パラ）をとりあげた作品や、Covid-19流行の今だからこそその疫病を祓う作品など、今、見ておきたい作品も多数あり印象的でした。千葉市美術館の豊富なコレクションがあってこそこの企画であることも注目したい点です。上記サイトで一部ですが「元」の作品とそれに呼応した作品をセットで見られるのでご覧ください。

作品の解説文を作家自身が執筆していることも特筆されます。わたしたち鑑賞者は、作品を見ると同時に、作家の思考や感性も見ようとしており、自身による説明文があることで、作品の理解が深まるように思います。2013年にリニューアルした東京都美術館（東京都台東区上野公園）で開催された個展でも同様に作家当人による解説でした。

https://www.tobikan.jp/exhibition/h25_fukudamiran.html

3◆特別展「植物」

<https://plants.exhibit.jp/>（特設サイト）

会場：国立科学博物館（東京都台東区上野公園）

<https://www.kahaku.go.jp/>

会期：2021年7月10日（土）～9月20日（月・祝）

注目した展示の一つとして取り上げます。

国立科学博物館で植物だけの特別展はおそらく初めてでしょう。NHK・朝日新聞などメディアも相乗りした大規模な展示でした。Covid-19の感染拡大にも関わらず、わたしが訪問した9月11日は会期末の土曜とあってかなりの混み具合でした。

巡回先の大阪市立自然史博物館はもちろん、わたしの所属館を含めて国内多くの自然史系博物館からもたくさんの標本・模型がたくさん出ていました。この企画で樹木の根を展示するために数年前から準備するなど、苦勞が偲べれます。

企画には不満が残ります。太陽エネルギーを元に有機物を作り出せる植物こそが地球の生命の大部分に加えて、人類の生命や生活・文化を支えてきた、今も支えている、ということをもっとストレートにアピールして欲しかったというのが率直な感想です。

植物の進化のコーナーでは、デボン紀・石炭紀には森林ができていたことが取り上げられていました。ここに気候変動・地球温暖化と結びつけた解説が全くなかったことに失望しました。2、3億年前に二酸化炭素を固定した石炭を、産業革命以来、エネルギー源として使うことで大気中の二酸化炭素が増え

たわけで、2021年に大きな課題・話題になった気候変動／地球温暖化をここで取り上げることには大きな社会的意義があったはずだからです。

これは一例で、この企画では植物の多様性は伝えていても、植物の重要性・大切さはほとんど伝わってきません。

現実の社会とかけ離れ、植物のめずらしさを前面に出す企画は、5年前、10年前の展示ならこれで良かったのかもしれませんが、現代の自然系博物館の展示としては、物足りない点を強く感じます。生態・環境の視点も不足していました。

音声ガイドはアート&パート制作、掛け合いなので聞きやすいものでした。園芸が趣味という滝藤賢一による語りは、与えられた原稿を読むだけの俳優・声優とは別物でした。

一般入場料・1900円は高すぎに感じます。Covid-19前に企画し、Covid-19で集客が見込めないことでこうなったのかもしれませんが。常設展を含め、このところのミュージアムの入場料の高騰は看過できません。検証が必要だと思います。

公式ガイドブックは朝日新聞のウェブショップで購入できます。A4判204p.、図録というよりしっかりした解説書となっています。会期終了後、科博のショップでは取り扱っていないことに驚きました。外部主催者制作の図録のショップでの取り扱いは会期中に限られるのだそうです。

※大阪に巡回します。

会期：2022年1月14日（金）～4月3日（日）

会場：大阪市立自然史博物館（一般1500円）

事前予約必要。

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/>

●山口直樹(北京日本人学術交流会責任者)

I ◆早尾貴紀『パレスチナ／イスラエル論』(有志舎2020)

「いまパレスチナ／イスラエルをめぐる問題は、直視することを放棄したくなるほどの惨状にある。パレスチナのガザ地区はイスラエルの建設したフェンスで封鎖され、物流も制限された巨大監獄と化し、パレスチナ人のデモには日常的にイスラエル軍によるスナイパーによる容赦ない狙撃が加えられ、東エルサレムでは理不尽な家屋破壊が遂行されている。そしてイスラエル社会内部にも国際社会にも、それをやめさせようとする動きは少ない。このような暴力を対岸の出来事としてみるのではなく、パレスチナ／イスラエルを日本も含む近現代世界史の文脈の中で論じ、またそれをとおして世界と日本を問い直すことが、いま求められている。」と本書にある。本書では、この問題を対岸の出来事としてみるのではなく、パレスチナ／イスラエルを日本も含む近現代世界史の文脈の中で論じている。以下のような構成になっている。

まえがき

第一部 国家主権とディアスポラ思想

第一章 ディアスポラと本来性

—近代的時空間の編成と国民／非国民

第二章 バイナショナリズムの思想的意義

国家主権の行方

第三章 オルタナティブな公共性に向けて

ディアスポラの力を結集する

第二部 パレスチナ／イスラエルの表彰分析

第四章 パレスチナ／イスラエルにおける記憶の抗争

—サボテンをめぐる表象

第五章パレスチナ／イスラエルの「壁」は何を分断しているのか
—民族と国家を示す五つのドキュメンタリー映像
第六章パレスチナ／イスラエルにおける暴力とテロリズム
第三部歴史認識
第七章 イスラエルの占領政策におけるガザ地区の役割とサラ・ロイの仕事
第八章 ポスト・シオニズムとポストオリエンタリズムの歴史的課題
第九章 イラン・パペのシオニズム批判と歴史認識論争

すべてについて論じられないので、ここでは、重要と思われる部分に限定してコメントを行う。まず本書の白眉となっているのは、第四章「パレスチナ／イスラエルにおける記憶の抗争—サボテンをめぐる表象」である。1948年という年は、中東でイスラエルが建国され、東アジアでは朝鮮半島で南北分断が行われる年である。この「1948」という数字をパレスチナ人たちは、「ナクバ」と呼ぶ。「ナクバ」とはパレスチナ語で災難という意味である。1948年のイスラエル建国は、パレスチナ人にとっては、故郷を喪失し、家族が離散する災難であった。この戦争や植民地支配に関する表象は、イスラエル／パレスチナの双方からなされてきたといえる。その表象のされ方は、作家の背景や立場を反映するものとして対立もしてきた。ここで著者が、とりあげるのは、イスラエルのユダヤ人作家ダニ・カラヴァンである。カラヴァンは、「ホロコーストを忘れないための記念碑」や「強制収容所囚人へのオマージュ」といったユダヤ人迫害に関するモニュメントをイスラエルやドイツ、フランスなどで制作しているという。カラヴァンは日本でも人気の高い作家らしい。カラヴァンは、「記憶」を扱う作家として多くの、哲学者、歴史家などに評価されている。とりわけ注目されているのが、1940年にピレネー山脈を越えたスペインの小さな町、ポル・ボウで自殺したベンヤミンについての作品である。

著者は、カラヴァンが、ベンヤミンを追悼して「パサーージュ」というモニュメントを制作していることに注目する。著者は、浅田彰氏や野家啓一氏が、高い評価をこのモニュメントに与えてベンヤミンの「歴史の天使」論を語ることを「予定調和的」とし、「カラヴァンの理解するベンヤミン、またそれを好んで引用する人々は本当にベンヤミンに寄り添っていたのだろうか」と疑問を投げかけている。実は、ベンヤミン自身は、シオニズムに対しては、懐疑的だったことを著者は、手紙から立証する。

また、カラヴァンの年譜に「1930年イスラエルのテルアビブに生まれる」という箇所があるがにこれに関して「1930年にイスラエルは存在しない」と指摘している。これを当たり前のように使う感性や知識は何なのかと著者は問うている。

そして最後の「ヴァルター・ベンヤミンの「歴史の天使」は、破局(カタストロフ)をこそ見ていた。その破局を見る天使は、予定調和的に最後に全体を保証するのではない。そうではなく一見調和的にまとまっている物語に「ショックを与える」ことで、この全体を破壊するのであったはずだ」という指摘は貴重であろう。

こうした視点は、イスラエルに留学した著者ならではのものであるといってよい。もうひとつ重要なのが第九章である。ここではイスラエル出身のユダヤ人であるイラン・パペが、取り上げられている。イラン・パペは、博士論文をもとにした『イギリスとアラブ・イスラエル論争 1948-1951』を単行本として1988年に刊行することで「新しい歴史家」として注目を集めるようになる。ここでイラン・パペが、重要なのは「橋渡しのナラティブ」という概念を提出しているからである。著者は、この章の一節に「「和解」と「橋渡し」の違い」という節を設けている。ここで著者が「和解」で意識しているのは、朴裕河の『和解のために—教科書・慰安婦・靖国・独島』である。この『和解のた

めに『教科書・慰安婦・靖国・独島』は、大仏次郎賞を受賞し、選考委員(佐々木毅、米本昌平、若宮啓文、入江昭ら)から大きな称賛を受ける。だがこの書には目につくだけでも二つの大きな問題があると著者はいう。すなわちこの書は、第一に一次資料に基づいたものではなく、二次資料にだけ依拠したものであること、第二にその特徴は「謝罪をしてきた日本」「謝罪を受け入れない韓国」という対立図式的な整理に単純化してしまっているということである。これを「和解」とするなら日本の植民地支配とそれを引き継いだ韓国の軍事独裁政権をともに批判しようとしてきた民主化運動を黙殺することになってしまうだろう。

それに対するイラン・パペの「橋渡しのナラティブ」とは自国や自民族中心の歴史を批判し、「迫害された側」の他者の歴史へと開いていくためのものであると著者は述べている。

その特徴は、第一に国家を正統化する正史を「ナショナルナラティブ」として厳しく退けること。ナショナルであろうとすると常に他者は「非国民」として隠蔽される。

第二に歴史のナラティブ論を「それぞれの語りがあっという風」に相対主義的にとらえることを批判している点である。

第三に「ナショナルナラティブ」を批判するにしても安易に「脱ナショナル」や「ポスト・ナショナル」というような観念に走るべきではないとした。

こうした点は、科学史や技術史においても重要と思われる。イラン・パペの問題提起は、私たち東アジアの住人にとっても普遍的な意味を持つといえる。「知の巨人」とされる佐藤優の『イスラエルとユダヤ人 考察ノート』(角川新書 2020)を覆しうるのは、この書である。

さて最後に私にとって「先生」にあたる人物が、本書にでていいることにも言及しておこう。本書の107頁にでてくる梅木達郎氏である。梅木は、東北大学大学院国際文化研究科でサルトル、デリダ、ジャン・ジュネを研究する研究者だった。

実は、著者、早尾貴紀と私の共通の先生は、梅木達郎氏であった。

梅木氏には早尾とともに山形国際ドキュメンタリー映画祭に連れて行ってもらったこともある。その後、早尾はイスラエルに飛び、私は北京へと向かった。私は、その北京で梅木氏が、自死したという知らせを2005年に受け取らねばならなかった。48歳だった。そのとき私は目の前が真っ暗になったことをよく覚えている。その梅木氏には「トラウマ・フラッシュバック・ゴジラ」『ユリイカ』(青土社1999年5月)という論文がある。この論文は『支配なき公共性：デリダ、灰。複数性』(洛北出版2005)という梅木を追悼した論文集には未収録だが、ゴジラを研究するものにとっては、忘れがたい論文である。

また北京清華大学で2011年9月、イスラエルの大学で日本映画史講義を行った四方田犬彦氏から「『ゴジラ』(1954)の映像を見せるとイスラエル人は、「奴は敵だ。ゴジラを殺せ」といったのに対してパレスチナ人たちは「ゴジラは、私たちの味方だ」と語った」と直接聞かされたのも忘れられない思い出である。

2◆山田板仁『認識論と技術論』(こぶし書房1996)

著者の山田板仁は、1908年12月20日に長野県諏訪市に生まれた。1929年に松本高等学校を卒業し、東京大学文学部哲学科へと入学する。1932年に東京大学を卒業後、報知新聞社に入社する。すでに東京大学在学中から『唯物論研究』に山岸辰蔵などのペンネームを使って論考を発表していた。報知新

聞社をやめた後は、東京府立第九中学校の教諭になるが、1940年にはその職も辞し、読売新聞社に入社する。その後、千葉工業大学教授となるも1950年にその職を辞し、1955年に明治大学経営学部の専任講師として再就職。1946年には民主主義科学者協会の『理論』創刊号に「新しき認識論のために」を執筆。晩年は、明治大学経営学部の『経営論集』と1979年秋に創刊された『クライシス』（社会評論社）を舞台に執筆をつづけた。1987年に没した。

この本には戦後啓蒙期に書かれた「新しき認識論のために」『理論』（第一巻一号）（1947年2月）「反映論についてI~II」『理論』（1950年1月、2月）「技術論について—その技術主義的・科学主義的偏向を批判す」『人民評論』（第12号、1946年12月）「科学者との協力のための条件—武谷三男君に与う」『理論』（第一巻第三号1947）「批判と前進—武谷氏との論争について」『理論』（第24号1948）「技術の概念について」『理論』（第一巻第四号）（1947）「当面する技術論の課題」『季刊大学』（1947年7月）「科学の階級制について」『理論』（第三巻第六号1949）といった論文が、収録されている。

まず、学べるのは、レーニン『唯物論と経験批判論』の反映論について観念論とされているマッハやボグダーノフを評価している点である。

第二に注目されるのは、武谷三男氏との論争である。

武谷氏といえば、戦後日本の技術論における大スターであった。だが、ソビエト連邦のルイセンコ学説に関しては、その誤りが明らかになって以降も武谷氏はこの説を信奉し続けた。（この点は、より詳しくは伊藤康彦『武谷三男の生物学思想—「獲得形質の遺伝」と「自然に対するヒトの驕り」』（風媒社2013）を参照）武谷三男氏は、物理学とりわけ素粒子論の専門家であったが、生物学の専門家ではなかった。生物学を物理学モデルで理解しようとするとうまくも無理が出てしまう。山田は「君は私がルイセンコについて書いているところを少しも理解していない。ヒステリーを起こす前に「とにかく人の論文をよく読むことをお勧めする」君は生物学についてはもちろん哲学についても「ディレクタント」に過ぎない」と1946年の時点で書いている。この記述は先駆的だったといえるのではないかと思う。

解説を『クライシス』の編集員で同僚だったいいだももが、書いている。山田技術論の問題点も含めて書いてあり一読の価値がある。

3◆相原コージ『ムジナ』（全9巻）（小学館1993）

2021年は、漫画家が多くなかった。その中には白土三平の名前があった。

白土三平は、『忍者武芸帳』『サスケ』『カムイ伝』『カムイ外伝』などの忍者漫画で知られた漫画家である。四方田犬彦氏によると手塚治虫の研究書が山ほどでていのに比して白土三平の研究書は数えるぐらいだという。そんな状況の中で白土三平『カムイ伝』のオマージュというべき作品が刊行されていた。

それが、相原コージ著『ムジナ』である。

著者の相原コージは、『コージ苑』『かってに白クマ』などで知られるギャグ漫画家だったが、この作品で突如、忍者漫画に開眼する。

主人公の忍者ムジナは、落ちこぼれ忍者で周囲から蔑みの目で見られている。それは、父親の忍者ゴキブリが、下忍（忍者の世界は、厳しい階級社会である）であり、どのような任務を言いつけられても必ず、死なずに生きて帰ってくるからである。その息子ムジナは、仲間からも「いい年をして下忍で、普通だ

「ったら中忍になっているか任務を果たして死んでいるかのどちらかだ」と笑いものにされている。それは家族も同様であった。ゴキブリの妻アヤメは、「私がどんなに肩身の狭い思いをしてきたか」についてゴキブリを責める。ムジナ自身もそんな父、ゴキブリを軽蔑し、「俺は父ちゃんみたいにはならない。みんなから尊敬されるような忍者になるんだ」と思っている。

ある時、ゴキブリに首領から招集がかかる。黒姫城という手ごわい敵がいる場所への招集であった。ちょうどその日の夜ゴキブリは、寝ているムジナを起こし、「刀をもってついてこい」という。そして誰にも見られない場所に着いたとき、ゴキブリは、「父ちゃんを殺すつもりでうちこんでこい」という。ムジナが言葉通りに打ち込んでいくとゴキブリに倒されてしまう。ムジナが、驚いているとゴキブリは、この術は「忍者の唯一の盲点をついた術だ」という。「でも、そんな術があるのならどうしてそれをつかって手柄を立てたりしなかったのか」と問うとゴキブリは、こう答える。

「わしがあの術を編み出したのは手柄を立てるためじゃない。己を守るためだ」

「任務を果たすためには死をもいとわない。それが忍び社会における立派な忍者のあり方だ。しかしわしは常に自分が生き残る事だけを考えて行動してきた。忍者としては最低だ。だが、わしは自らすすんでその最低の忍者を選び取ったのだ」

なぜゴキブリはそのような選択をしたのか。その理由が明かされる。ゴキブリには、年の離れた兄がおり、村では名を知らぬものがないほどの忍者だった。だが、そのため次々に仕事が舞い込み休む間もなく、任務に追われていた。疲労のピークに達した時、敵につかまってしまった。そこで拷問を受けていた兄は、情報漏洩を防ぐために仲間の手によって殺害される。

ゴキブリは、ムジナにいう。

「これが忍者の現実だ。しかもわしらはここをでて生きていくことはできない。だからわしはそれ以来、立派な忍者になることをやめ首領にとって組織にとって最低の忍者になってやることにしたのだ」

「立派な忍者になることーしかしそれはなんら本人のためにはならない。結局は首領を肥え太らせおいしい汁を吸わせるだけだ。わしら忍者は、首領のために行き、首領のために死んでゆく、そういう存在なのだ。決して自分のために生きることは許されない」

そしてゴキブリはムジナにこう教える。「だからこそムジナ、馬鹿にされても、うしろ指さされてもゴミくずになっても生きぬいてやれ」と。

「わしがあの術をお前に教えたのは、そのためだ。己が手柄をあげるためではない。己が生きていくためだ。ただしあの術は必殺の術だ。敵にも味方にもけっして知られてはならん。術の実態を知る時、それは相手が必ず死ぬ時だ。」

「いいかムジナ、頭を使うんだ。頭を使って術をあみだし、この忍者社会のなかで生きて生きて生き抜いてやるんだ。」

そしてゴキブリはムジナにもうひとつの教えを教える。

それは「愛する者をつくるな」ということであった。

そのわけは、ゴキブリによれば「忍者の掟においては、愛する者は自分を縛るから」ということであった。ゴキブリはムジナに「母さんを頼んだぞ」という言葉を残して任務に赴く。敵陣にのりこんだゴキブリは、敵に取り囲まれ、生きて帰ってくることはできなかった。

そしてムジナは、ゴキブリの授けた秘術をつかってどのように忍者社会を生きぬいていくのか。それ

は全 9 巻を読んでいただきたい。ここでいう「忍者社会」は「企業社会」と読み替えてもいいように思う。

冒頭に掲げてある「群雄割拠する戦国の世／その陰には／暗中飛躍する／忍者の姿があった／死を賭して／闇から歴史を動かした／陰の男たち／そんな秋霜烈日な定めを／生きる彼らの中に／独り異端の忍者があった／彼の目的は只ひとつ／生きぬくこと」という言葉からは、白土三平『忍者武芸帳』の影響を見出すことができる。本書は、愛を信じない漫画家、相原コージが愛を描いた傑作忍者漫画である。知名度でいえば、Naruto やバジリスクが、はるかにあるが、私はそちらよりもよもこちらを推す。誰かすぐれたムジナ批評やムジナ論を書いてくれないかなとも思う。

●谷 敦 @市民研 2 年生

1 ◆プチ展覧会「緒方貞子さんと聖心の教育」@聖心女子大学グローバル共生研究所

緒方貞子氏の母校、聖心女子大学の新校舎一部でのささやかな展示会だが「小さな巨人」と称された緒方貞子氏を育んだ聖心女子大学と教育者マザー・ブリットの教育理念やテニス三昧だったと述懐されるその学生生活などにスポットを当てた展示内容が、この方の瞬時に本質を見抜く洞察力、暖かい人間性と筋の通った論理、それを貫き困難な交渉を続けて最後には実現に至る、粘り強くタフな判断力・行動力・精神力の源を感じさせる。

聖心女子大学キャンパス内での展示会だが、この展示会場と中庭を挟んだエスニック料理レストランは外部にも解放されており、展示会は無料で見られるのもありがたい。期間も 2023 年 4 月迄と長く、途中で展示替えも予定している模様。日曜、祭日は休館、平日の 10:00～17:00 開館。余談だが、この建物(聖心女子大学 4 号館)はもともとは青年海外協力隊の事務局兼派遣前訓練所として建てられ、長く使用されていたもので、この地から何万人もの青年が海外へ向けて飛び立っていった。入口の右手には今でも協力隊物故隊員の慰霊碑が残されている。

展示 緒方貞子さんと
聖心の教育

2021年 5月13日 (祝)
2023年 4月27日 (土)
(入場無料)

“マザーブリットから受けた教訓は限らない”
マザーブリットは、緒方貞子さんの幼少の最良の生活環境の一つとして、そして学生時代の生活に於いて聖心の教育と初任学長マザーブリット時代を紹介いたします。
本展示を通して、緒方貞子さんの力強く育った、現代社会における地球規模の課題への関心の方が、より多くの人に受け継がれ、一人ひとりの行動の蓄積につながることを期待したいと思います。

聖心女子大学
グローバル共生研究所
Sacred Heart Institute for Sustainable Futures (SHISF)

BE*hive
サマースタジオ・カフェ
期間：3月24日(土)～5月17日(水)
10:00～17:00 (最終日は16:00まで)
〒100-8557 東京都千代田区千代田1-2-2
電話：03-347-3411 (休平日)
〒100-8557 東京都千代田区千代田1-2-2
電話：03-347-3411 (休平日)

2◆テレビ・ドキュメンタリー番組「NHKスペシャル 開戦 太平洋戦争 日中米英 知られざる攻防」

歴史を遡り、蒋介石本人の当時の日記を紐解き見えて来たものを探ったドキュメンタリー番組。日本軍による真珠湾奇襲作戦がどのように計画され実施されたかについては、数多い歴史研究があり、小説や映画等にもなっていますが、その影に蒋介石の存在があったとは！……(歴史に疎い私には、蒋介石と真珠湾がにわかには結び付かず、???でしたが).....驚きました。

大きな歴史の転換点、一つの論が「正解」で他は「間違い」というものではないのですが、少なくとも一考に値する記録と思いました。

2021年8月と12月に放送された番組だが、私とすれば、「再放送」を期待し、歴史にお詳しい方に解説をお願いしたいというのが正直なところ。

3◆栗原康『サボる哲学: 労働の未来から逃散せよ』(NHK出版新書 2021年)

おススメに選びながらこう評するのは甚だおかしいかもしれませんが、一言でいえば品の無い本です。良くも悪くもヨーロッパが牽引して来た近代文明の裏面を抉り、そこで利用され、足蹴にされ、蹂躪され続けた人々の視点から見た近代文明論と言えるかもしれません。歴史の暗部を見つめながらそれを俯瞰的、理性的、冷静に描くことを放棄して敢えてその渦中に身を投げ込み、血湧き肉躍る冒険活劇を描く如くに生々しく描写している点が異色。善悪の一つ一つの局面にも置かれた状況の厳しさ、激しさや狡猾さ、支配・差別・服従・隷属、それに抗う反乱・逃亡・自由・独立にも長い歴史と細かなヒエラルキーがあることが分かります。

『人新生の資本論/斎藤幸平』は名著だと思いますが、本書はその「海賊盤」とも言えるかもしれません。

●橋本正明

1◆人新世の「資本論」 斎藤幸平 著 集英社新書 2020

著者はこの1~2年でNHKなどの番組でも度々見かけるようになったミレニウム世代を代表する論客である。

勿論表題に或る通り「資本論」について語るのではあるが、その切り口は現代風に「気候危機」であり、環境問題と絡めた「資本」の解釈である。

ここにはあまりコミュニズムの匂いは感じられない。

むしろ「コモン」という古からの概念が新鮮にすら感じさせる何かがあると思う。

一度では読み取り切れなかったので、改めてまた近々に再読してみるときっと違う切り口や味わいが感じられるに違いない。

そして新しい時代の息吹を感じる事が出来るかも知れない。

2◆電源防衛戦争－電力をめぐる戦後史 田中聡 著 亜紀書房 2019

私の場合稀にあることなのだが、普段あまり出入りしない本屋の書架を大急ぎでレジに向う途中で「この本に呼び止められた」

何故かはわからないが、不意に振り向いて目の焦点が合った先にこの本のタイトルが飛び込んできた。迷いなく私は手に取って会計へと向かった。

そしてこの本を読んでみて、現在の電力体制が如何にして成立したものなのか。理不尽と権力闘争と暴力がその裏に蔓延っていたのか、その一端を垣間見たような気がした。そして「戦後」という時代の息遣いを耳元で感じたような気になった。

そんな本である。

3◆大規模停電の記録 電力システムの安全とレジリエンス 大規模停電の記録編集委員会 著 オーム社 2021

大規模停電というキーワードは最近よく耳にする…、いや遭遇するようになったように思われる。

2018年の北海道のブラックアウトは勿論、2019年夏の台風災害による千葉県の長期大停電や東日本大震災の際の計画停電は大停電を引き起こさないためにエリアと時間を定めた一種の大規模停電だった（と私は思っている）。

この書は主に不慮の自然災害に起因した発電機の送電系列からの脱落（トリップ）が、人為的なミスや設計不良などで大規模停電に拡大したその原因や対策について歴史的な実例を以て説明する、いわば今後大停電を引き起こさないための【教科書】である。

それにしても停電の原因では樹木への送電線の接触が多いことに驚いた。

この書を通じて、やはり適切な森林や樹木の管理は必要不可欠であると痛感すると同時に、大出力の発電所が存在する限り、きっとまたどこかで大規模停電は発生するのであろうとの確信が強まった次第である。

●平賀緑

◆神野直彦『「分かち合い」の経済学』（岩波新書、2010年）

<https://www.iwanami.co.jp/book/b226027.html>

「政治を束ねる責任者が『格差のどこが悪い』、『格差のない社会などない』と鬣をふるわせながら絶叫する社会は、『絶望の社会』である」との名言から始まり、格差と貧困を意図的に作りあげ「絶望の悪循環」を形成してきた日本の政治経済過程をスタボロに批判してくれている一冊です。読みながら胸が空くと同時に、ニュースの行間が読めるようになると思います。財政学という著者の背景にこだわらず、今の世の中「何かおかしい」と感じた人にはぜひ一読いただきたい、誰もが人間らしく働き生活できる社会を具体的に提案する一冊です。

●瀬川嘉之

1◆斎藤憲『アルキメデス『方法』の謎を解く』岩波書店、2014年

最終章でギリシア数学の図形（幾何）と近代数学の量（関数）を峻別しつつ、1500年代のイタリアにおけるアルキメデスの翻訳や解説が、ニュートンやライプニッツによる微積分のような新しい数学につながったことを示しています。数学と物理を関係させているところからアルキメデスは先駆者と言えるようです。古典ギリシアなくして近代西洋の科学や技術なしの感があります。ほとんど古典ギリシアを前提としない中国や日本等、東洋の学問や技術のほうが何なのかこそ、むしろ検討したくなります。

2◆廣田 襄『現代化学史—原子・分子の科学の発展』京都大学学術出版会、2013年

物理化学者による化学史の大著。アヴォガドロの仮説として酸素や窒素のような気体は2原子分子だとか、周期表で希土類元素が表の外にあって一番右の希ガスは不活性だとか、化学で最初に習う事柄について以下のような記載があります。

「単体の2原子分子における結合の本質は、実に126年後、量子力学によって共有結合の本質が明らかにされるまで理解されなかった」

「希土類の周期表における位置の問題が解決されるのは、20世紀に入ってボーアの原子モデルが提出され、モーズリーによるX線スペクトルの研究が行われてからのことである」

「なぜこれらの元素が不活性であるかを理解するには量子論の出現を待たねばならなかった」

そもそも物質がすべて原子、分子でできていると確定するのは量子論、量子力学によってなのですから、当たり前と言えれば当たり前で驚くには当たらないのかもしれませんが。

それにしても、物理の理論ができないと説明できない化学は遅れていると見るか、新しい理論でないと説明できない現象を早くから扱うほど進んでいると見るか、どちらかと言えれば後者ではないでしょうか。

だからこそ、危険性もはらむ化学研究の動向には目が離せません。

3◆寺島善一『評伝 孫基禎 スポーツは国境を越えて心をつなぐ』社会評論社、2019年

昨年2021年は2020年東京オリンピックがあった関係で、1936年ベルリンにおけるマラソン金メダリストの評伝を偶々読みました。近代オリンピックは近代国家とともにあり、大日本帝国の記憶の一部としても孫基禎については語り継がれるでしょう。

●鈴木綾

1◆「改訂版 社会的ひきこもり」 斎藤環(PHP新書)

著者は精神科医で、長年の治療現場の経験からの実践アドバイスを書いている。

思春期から長い経過をたどるひきこもりを回復させて行くにはまず社会と家族、家族と本人のそれぞれの接点(コミュニケーション)回復がスタート。その先に本人の社会との接点回復がある、そこから本当の回復が始まるとあり、納得。そのためには、両親がまず意思統一して「治療」に通い始めることで、親の社会との接点を回復する。それはひきこもりの現実を直視し明らかにすることでもある。それから本人とのコミュニケーションを再度丁寧に構築していく。それには本人の気持ちをまず丁寧に聞くことだが、全てを無条件に受け容れるということではない。枠組みのある受容をめざす。具体的には家族で「世間話ができる関係」になること。親の側に自責の意識が強いと共依存的になりやすいので、そこをクリアするためにも「治療」につながるべき。2, 3年では動きは見えない位でも必ず回復に向かうので焦らずに関係を保ち続ける。大変なことだからこそ、諦めないでまず親が治療に向かうべき、と。

多くは思春期の課題として始まるので、本人はずっとその時の思春期的精神状態のまま、ひきこもりが長引くほどそのひきこもり自体が本人を傷つけ家族を巻き込んでいく。ひきこもりから脱出していく過程で出会う他者に支えられる経験があって初めて、最初に受けたいじめや他者の与えた傷を乗り越えることができる。病気をして初めて免疫力があがるように、他者に受けた傷を他者によって回復してはじめて人間的な成熟が可能になる。

具体的には10代からの引きこもりであれば、30歳を一つの区切りとして、10年以上のその状態をその後、どうしていくのかを精神科医のバックアップを受けながら、きちんとお金の問題として親子で話し合っていくべきだとも。80代の母が亡くなり、50代の息子が心神弱って発見された例もあり、引きこもり自体は病気ではないとしても、10年以上、社会との接点を持つてない状況は「困ったこと」だと言ってあげる必要もある。親が老いるにつれ経済的にずっと子を養うことはできない。その先の生きていく道として、障害年金を受ける・世帯分離して生活保護を受けるなど、その人がその人として生きていける道を付ける。そんなことは望まないというままに延々と同じ状態を続けるのは一番酷なこと。その話し合いを機に居場所や就労支援につながればそれがなによりのことである。

学校が誰にとってもいい場所とは限らないことを痛感しつつ、イヤなら行かなくていいよと言う代わりに、学校よりも未来につながる場所を作れるだろうか？ コロナで学校に「行かなくていい」状況が、安心できない家庭に子どもを「閉じ込めている」怖れもある今、悩ましいことは多い…。一筋縄ではないな…。

2◆「わたしのいないテーブルで」 丸山正樹 東京創元社

2020年、某新聞連載で読み始め、引き込まれ、知らなかった手話通訳～日本手話について知る。2021年、1冊にまとまり改めて読み、手話通訳士荒井と、その家族のこの前を知りたいと遡ってシリーズを読んだ。

日本語を逐語訳的に「手話」にしても、ろう者にとっては言語として不十分だということ。口話にこ

だわった聾学校教育がろう者をどれほど理解しないものか。日本手話はろう者のコトバ。聴者には覚えにくいですがそれは当然のこと。外国語を覚えるのと同じなのだから。違う言語で語り合うには、相互の理解し合いたい思いが伝わるのがまず前提となる。聴者の家庭にひとり、ろう者がいる場合、ろう者が情報遮断のなか、存在を無視されていくことが起こりがちということ。逆にろう者の家庭に聴者の子どもができると、その子は親と他の人の「通訳」をせざるをえなくなる。コーダ(Children of deaf adult)といわれる育ちの荒井の葛藤と、ろう者の娘がその母を刺してしまった事件の裁判を描きながら、家族がわかり合うとはどういうことかを問いかける。ろう者の娘は聾学校を卒業後、独立して働いていたが、コロナ禍で職を失い、住む場も無くし母の元に戻る。おとなしく暴力などふるうはずない娘はなぜ、母を刺したのか？

筆者は自分のような者(健聴者で家族にろう者もない)がこのシリーズを続けていいのかと書いているが、この家族の行方は読んだらもう誰も他人事とは思えないだろう。ぜひこの先も書いてほしい。読み続けたい。

3◆サンマ・デモクラシー

映画です。

アメリカ占領下の沖縄で、サンマを巡る裁判があった。沖縄が日本に復帰したいと盛り上がっていた頃。

戦後、沖縄でも日本の味として親まれるようになったサンマ。しかし 1958 年の高等弁務官布令 17 号によって、大衆魚サンマにも 20%の「輸入関税」！がかけられる。高等弁務官とは、琉球列島米国民政府 USCAR のトップで、布令は沖縄住民にとって絶対のルール。ところが布令の文書を精査すると、課税品目の中にサンマそのものの名前は記載されていなかった。そこで、冷凍サンマの輸入販売業者であった玉城ウシ(ウシおばあ)が 63 年、課税を不当として、納税先であった琉球政府を訴えた。結果は見事勝訴し、ウシは 59 年から納付してきた約 4 万 7000 ドル(現代の貨幣価値にして 7000 万円超)の還付を受けた！…最初のサンマ裁判

1966 年、ある漁業会社が、「物品税法」(関税)を定めた USCAR の布令が無効であると訴えたが、これはのちに「裁判移送」という重大事態を招き、当時、報道でも大きく扱われた。裁判移送は沖縄戦後史上の大問題で、復帰運動が高まるきっかけの一つと言われる。USCAR はこの年、審理中だった 2 つの訴訟を琉球政府の裁判所から取り上げ、米国民政府裁判所に移すという強権発動し、沖縄の自治を制限した。2 つを合わせ、「友利・サンマ事件」と呼ばれた。立法院選挙で当選した友利隆彪(ともしり・たかたら)を失格とする決定に異議を申し立てた「友利裁判」、そして「サンマ裁判」だ。…第 2 のサンマ裁判(参照ニッポンドットコム)

当時の庶民の台所事情がわかり、高等弁務官の横暴を知り、ただ怒りまくるのではなく、ウシおばあ、友利ラッパ、カメ(ジロー)らのけして負けない戦いを闘っていた先人を改めて見直す…映画としておもしろく、笑いながら、沖縄は基地抜き本土並みの日本を選んだのに…と胸に刺さる思いも。今年は本土復帰 50 年、今なお居座る米軍から新型コロナ感染が広がっている…。

●丸山節子

引き続き在宅時間が多くなった2021年 音楽鑑賞と少しの読書を。世の中のさまざまな動きに関心を持ちつつ、書籍を選びました。

1◆「西洋美術とレイシズム」 岡田温司著 ちくまプリマー新書（2020年）

人種主義あるいは、人種差別と西洋美術との密接な関係。

旧約聖書を聖典とする三つの一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教）。

実際の絵画の写真と共に、キリスト教がどのように他の宗教との区別を描いてきたか具体的に紹介する本。方舟で知られるノアの話から始まるという驚きと共に読み進め、新しい気づきと視点を与えてもらいました。文庫なので、紹介画像のサイズが小さく、それが残念でした。



2◆「クラシック音楽と女性たち」 玉川裕子編著 青弓社（2015年）

- 第一章 ジェンダーの越境者カストラート〈劇場〉
- 第二章 家庭に鳴り響く音楽〈家庭〉
- 第三章 女性職業音楽家の誕生〈公開演奏会〉
- 第四章 開かれた連帯—近代イギリスの「女性音楽家協会」〈協会〉
- 第五章 にほんの学校教育を支えた洋楽と女性〈学校〉
- 第六章 女性と音楽のたしなみの日本近代〈家庭〉

音楽が奏でられるその場その場にその時代、社会の中で女性がどのように音楽に親しみ、時には闘いながら、自分らしさを確立してきたかが綴られます。

オペラの草創期、時のローマ教皇が「女性の舞台出場禁止令」を発したところからのカストラート誕生という、第一章の始まりから惹きつけられました。クララ・シューマンとファニー・ヘンゼル（メンデルスゾーン）が出会っていたという、嬉しさもあり。才能に恵まれながらも女性であるという理由だけで、男性と同様の活躍が難しかった女性たち。今もその闘いは続いていると言えるのです。



3◆歌劇「イオランタ」ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

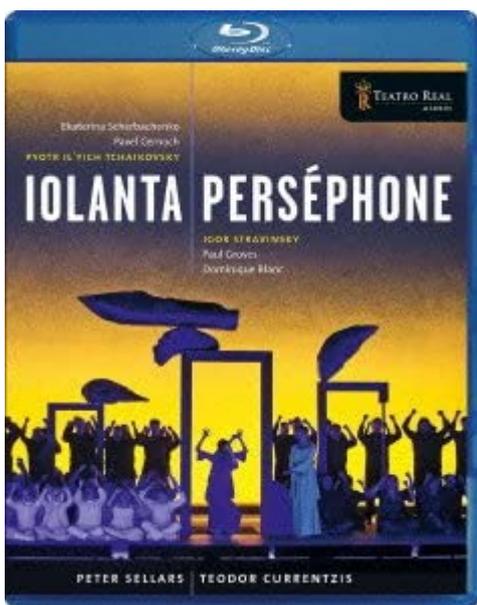
テオドール・クルレンツィス指揮 レアル・マドリッド管弦楽団・合唱団（2012年）
 イオランタ：エカテリーナ・シェルバチェンコ
 ルネ王：ドミトリー・ウリアノフ
 医師イブン・ハキア：ウィラード・ホワイト
 ヴォデモン伯爵：パヴェル・ツェルノフ

アンデルセンの童話をもとにしたチャイコフスキー最後の1幕のオペラ。

この歌劇は短いこともあり、バレエ「くるみ割り人形」と併演される事が多いようなので、美しく楽しいおとぎ話風の舞台がオーソドックスなものかなと思われます。

しかし、この演出は、シンプルな衣装と舞台装置で、光と影を強調しつつ、登場人物のそれぞれの思い（葛藤・いたわり・希望・熱意）を配役がひたすら歌います。コロナ禍で世の中がさらに複雑に生きづらくなっている今、長い時を越え、日々を過ごす中で大切な事に改めて気付かされる思いでした。

最後の、光をもたらす天の神への感謝の場面では胸がいっぱい。歌の力を感じさせられます。歌手はそれぞれ達人揃い。上記以外では、マルタ役のエカテリーナ・セメンチュクの慈愛に満ちた表情と歌声に惹かれました。



●白井基夫

1◆谷川健一：編『地名は警告する 日本の災害と地名』富山房インターナショナル、初版：2013年3月

2011年の東日本大震災後に企画された。編者の谷川氏は代表的な民俗学者の一人で、この本が刊行された半年後に亡くなっている。

まち歩きが好きな私は、どうしても、まちの名前と、その土地の地形が気になる。私の自宅がある埼玉県には「うなぎがおいしいまち」として、浦和や川越などに有名店があるが、うなぎが棲息する環境を考えれば「さもありなん」ということになる。さいたま市にはその名もズバリ、見沼区がある（見沼は狭く見ても、足立区の見沼代親水公園から行田市まで続く一帯）。朝霞市に浜崎、春日部市に浜川戸などの町名がある（もちろん内陸なのだが）。東京の下町では橋のつく地名を見かけるが、これは低地である証拠。その付近で、たびたび川の氾濫がなかったか、気になる。

本書の内容は、やや専門的。目次には、「釧路地方沿岸の津波災害 体験が語る十勝沖地震とチリ津波」「群馬の災害地名 浅間焼け、弘仁九年地震などの遺した地名」「長野県の活断層と災害地名 災害箇所の予知のために」「水害と地名 紀伊半島を襲った明治と平成の大水害」「熊本白川大水害と北九州豪雨白川流域に刻まれた災害地名」などの論考が並ぶ。

地名については雑学的に知るだけでもおもしろいが、歴史的な資料、具体的な被害状況など、詳細に載っているところが魅力。

2◆澁澤龍彦：原作／近藤ようこ：漫画『高丘親王航海記』KADOKAWA、初版2020年9月（第1巻）

幻想小説『高丘親王航海記』は、1987年に刊行された澁澤龍彦の遺作。私は刊行直後、函入りの単行本を買って、一気に読んだ。そのときの、現実感覚を失うような体験を、きのうのこのように覚えている。現在は、文春文庫に入っている。

文藝春秋のサイトでは、その内容がこう説明されている。

「幼時から父平城帝の寵姫藤原葉子に天竺への夢を吹き込まれ、エクゾティズムの徒と化していた親王は、怪奇と幻想の世界へと旅立ちます。鳥の下半身をした女、犬頭人の国……。著者ならではの幻想に満ちた華麗なる物語が展開します」

これを漫画化するという、無謀ともいえる挑戦をした近藤ようこ。2020年9月から刊行され、現在、第4巻まで出ている。第5巻は、今年の5月頃の刊行らしい。楽しみにしている。

近藤ようこは、折口信夫の『死者の書』も漫画化している。機会があれば読んでみたいと思う。Wikipediaで彼女について調べると、「折口民俗学にあこがれて國學院大學文学部文学科に進学」とある。1980年代前半から、数多くの著作があることがわかった。

3◆亀山郁夫・沼野充義：著『ロシア革命100年の謎』河出書房新社、初版：2017年10月

碩学二人による対談。深く、広く、さまざまな事象について検討している。「ああ、そうでした」「確かにそうですね」となじむのではなく、問題をどんどん押し広げて展開したり、掘り下げたりして、議論をすすめている。

まず、目次を紹介しておく。

- 序章 ロシア革命とは何だったのか？
- 第1章 農奴解放からテロリズムの時代へ—ドストエフスキーの父殺し
- 第2章 一八八一年からの停滞—チェーホフと黄昏の時代
- 第3章 革命の縮図—トルストイの家出
- 第4章 世紀末、世紀初頭
- 第5章 一九〇五年の転換—ロシア・アヴァンギャルドのほうへ
- 第6章 一九一七年「ぼくの革命」—マヤコフスキーの運命
- 第7章 内戦、ネップ、亡命者たち
- 第8章 スターリニズムの恐怖と魅惑
- 第9章 ロシア革命からの100年（レーニンとスターリン）
- 第10章 雪どけからの解放
- 第11章 ポストモダニズム以後
- 終章 ロシア革命は今も続いている

[年表] ロシア革命への／革命からの100年

[人名キーワード] ロシア革命の100人

知らない人名がつきからつきへと、100人は出てくる。政治家、政治活動家、小説家、詩人、批評家、映画監督、思想家、作曲家、画家など、クラクラするくらい。

そもそもロシアとは何かを知るための、重要な1冊だと思う。そして、いま、ロシアによるウクライナ侵攻というなまなましい状況が迫っている。その思想的背景には「ユーラシア主義」があると私は考えているが、このような現在につながる根っこも見えてくる。

1000円ちょっとでこの内容、正直、驚愕である。関連書10冊分の価値はあると思う。私によるこの程度の紹介でも、興味のある人は「買うしかない」と思うはず。

●中田哲也

昨年6月から開催中の市民研主催「食と農の市民談話会」で話題提供して下さった方のご著書の中から、一部を「おススメ」させていただきます。談話会に参加して下さった方はもとより、食や農に関心のある方にはぜひ手に取って頂きたい本ばかりです。

(参考) 食と農の市民談話会のページ (市民研ホームページ)

https://www.shiminkagaku.org/agrifoodmeeting02_202201/

I ◆大和田順子さん【第4回で話題提供頂きました】

『アグリ・コミュニティビジネス』(2011.2、学芸出版社)

<https://book.gakugei-pub.co.jp/gakugei-book/9784761512804/>

著者は東京生まれ。百貨店、化粧品会社、NGO等を経て、現在は同志社大学ソーシャル・イノベーションコース教授を務められています。

かねて大和田さんは「豊かで幸せな地域づくり」に関心を持ち、実践をされてきました。そのキーワードが「アグリ・コミュニティビジネス」。そこにしかない“農山村力”と、都市生活者と農山村生活者の“交流力”を組み合わせ、地域の課題を事業経営の発想で解決していこうというもの。実際に関わられた多くの事例のエッセンスも紹介されています。

なお、大和田さんは今年度の総務省「ふるさとづくり大賞」の大臣表彰（個人）を受けられました。談話会でも話題提供頂いた宮城・大崎での実践が高く評価されたとのこと。

https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei09_02000110.html

2◆平賀 緑さん【第6回で話題提供を頂きました】

『食べものから学ぶ世界史－人も自然も壊さない経済とは？』（2021.7、岩波ジュニア新書）

<https://www.iwanami.co.jp/book/b584818.html>

著者は広島県生まれ。金融機関勤務、市民活動の実践等を経て大学院（ロンドン市立大学、京都大学）に進学し学位を取得、現在は京都橘大学経済学部准教授を務められています。

本書では、現在の「資本主義的食料システム」がもたらしている多くの問題点が明らかにされています。食や農も、資本主義というオペレーションシステムに組み込まれているため、経済的効率性を優先した工業的農業生産が行われ、地球環境、人の健康、地域社会を破壊しているとのこと。

その資本主義自体が行き詰まりつつある現在、私たち一人ひとりが、どのように人と環境に望ましい持続的な食と農のシステムを築いていくかについて考える必要があると、平賀さんは訴えています。

3◆浅見彰宏さん（第7回で話題提供を頂きました。）

『ぼくが百姓になった理由（わけ）－山村でめざす自給知足』（2012/11、コモンズ）

https://shop.ruralnet.or.jp/b_no=05_86187098/

千葉県生まれで大手鉄鋼メーカー勤務と、農業と全く縁の無かった著者は、1993年の米の大凶作を目の当たりにして農業を志すようになり、埼玉・小川町での研修を経て、1996年、条件不利な山間地にある福島・喜多方市山都町に移住・新規就農されました。

本書では、就農当初から2011年の東日本大震災・原発事故までの間の、地域での著者の奮闘の様子が描かれています。江戸時代に開鑿された用水路を管理する「堰（せき）さらいボランティア」など、様々な交流の取り組みや成果についても紹介されています。

浅見さんにとって有機農業とは「行き過ぎた市場経済によって失われた人間と自然との関係、人間と人間との関係を取り戻す運動」とのこと。著者は現在、NPO法人福島県有機農業ネットワークの理事長としても活躍されています。

●上田昌文

2021年に出会った本から、やさしい言葉によるやさしい語りが、どれほど力をもつものであるかを端的に示した、と私に思えた本を、3つ選んでみよう。

1◆長田弘『なつかしい時間』（岩波新書 2013年）

私が2021年に一番ゆっくりとページを繰ったと思える本。あとがきの最後に、「バッハの平均律クラヴィーア曲集の四十八曲のように、いくどもくり返される主題をたのしみつつ読んでいただければ」とあるとおり、まさにそのように私は読んだ。

内容については多言を要さない。主にNHK教育テレビの『視点・論点』で17年にわたって語ってきたものを集成しているが、その期間は阪神淡路大震災から東日本大震災（長田の故郷は福島県）までの年月を含む。詩人である著者がこれまでに詩やエッセイの創作をとおしてみつめてきたものが、時勢をふまえて語り直されている。

そのやさしい言葉は、自然のなかで樹木や風や水の流れに感じる息吹に似ていて、それに触れると、命ある存在としての根源に自分が引き戻されるような感じを覚える。再びあとがきを引用すると、「自然が日々につくりだすのは、なつかしい時間です。なつかしい時間とは、日々に親しい時間、日常というものを成り立たせ、ささえる時間のことです」とある。2013年、著者が亡くなる2年前に出した本だが、この本の言葉を読むこと自体がなつかしい時間を生み出す—これはそのような本なのだ。

2◆板倉聖宣ほか『板倉聖宣の考え方 授業・科学・人生』『たのしい知の技術』（ともに仮説社 それぞれ2018年、2001年）

2020年10月から2021年9月にかけて毎月1回研究発表を行った「日本の市民科学者 その系譜を描く」では、たくさんの人物とそれらと関連する書物を取り上げた。それらには、あるいは刺激となり、あるいは支えとなり、あるいは引き続き考究の対象となり……といった具合に、この先も様々につきあっていくことになるだろうものが含まれる。

そうしたなかで、誰もが直ちにわかるやさしい語りで、単刀直入に「あなたはあなたがほんとうに学びたいものを学んでいますか？（学ばなきゃいけないと言われたから学んでいるのではありませんか？）」「科学はみんなのものになっていますか？」と問いかけてやまない人物として、板倉聖宣を挙げることができる。

仮説実験授業の提唱者にして実践者であり、教育運動としてのその影響力は特筆すべきものだろう。運動の一環として出版社「仮説社」を創り、「サイエンスシアターシズ」を始め、数多くの「自ら試してみよう」という志向に貫かれた—科学の創造に誰もが参画できることを目指した—具体的かつ探索的な科学書を著した。『模倣の時代』を始め、ユニークな科学史研究書も多数ある。

板倉聖宣の人物像は、これからきっと誰かが評伝なりをまとめることになるだろうが、まずは手早くその人となりにふれるのに、この『板倉聖宣の考え方 授業・科学・人生』は好適だと思う。また、彼の「知的技術」を披露した『たのしい知の技術』も、“板倉節”全開で、具体的かつ個性的なノウハウに

溢れている。

中学生から大人まで誰にでもすらすらと読めて、しかも読んだ人に必ず「よしやってみよう！」という一歩を踏み出させる。このような書き手は、もうほとんど目にすることがないように感じているが、どうだろうか。

3◆森本哲郎『書物巡礼記』（文化出版局 1985年）

ずっと以前から古書店でこの著者のいろいろな本をたびたび目にすることはあったが、ふとしたことからその1冊を立ち読みして、「あれ、なかなかいいかも」と思って買って読んだ。以来、古本市などで目にするたびに購入してきたので、ちょっとしたファンになった、と言うべきか。

新聞記者として鍛えあげたスタイルなのだろうか、取り上げる対象が過去の哲学者や文人に及ぶ場合でも、ゆかりの地に出かけて一実際に世界各地を巡っている—まるで取材をして記事をまとめた場合のような読みやすさがある。単なる解説で終わるのではなく、出会った対象に寄り添いながら自分の考えを熟成させていく。つまり読む者と一緒に歩みを進めていくような、率直さや別け隔てのない感じがある。

さて、森本哲郎の数ある本のなかの一冊である『書物巡礼記』。本を探し求めること、出会うこと、それを買うこと、そして自分の本棚に収めること、が人生の大きな楽しみであることを、これほど愛情豊かに語った本を、私は知らない。著者が語るに、本探しは恋人探しに似ている。なので、書評で本を選ぶことはない。恋人を他人の評価で選ぶ人はいない。直接の巡り会いこそが恋を生む。古本屋巡りはそのためのものだ……。

私もまた絶版になって久しいだろう『書物巡礼記』を、立派な装丁のままの本で古書市で手に入れた。なんとそこには「謹呈 森本哲郎」と書かれた栞（和紙、縦18センチ横6センチほど）が入っていた。著者自筆の毛筆のじつに素晴らしい大きな文字—著者がうんと身近に感じられるようになったことは言うまでもない。

【番外・音楽編】

昨年の音楽体験のなかで特に感慨深かったものを列記しておこう。

1◆ミケル・ウルキーザ「さえずる鳥たちとふりかえるフクロウ」

ある友人から譲っていただいたチケットで赴いたのが、神奈川県立音楽堂で開かれた、現代音楽の演奏では突出して有名なアンサンブル・アンテル・コンタンポランの演奏会だった（8月30日）。コロナの関係で開催が危ぶまれていたが、人数制限をしてなんとか開催できたコンサートだった。現代音楽だけのコンサートはじつに久しぶりで、飛び抜けていい席で、演奏者のパフォーマンスをすべて克明に目のあたりにできたという点では、まれにみるスリリングな体験となった。コロナ対策ということもあって、曲が終わってからの演奏者の配置換えのたびに、奏者の座る座席と譜面台を「紫外線照射機」を当てて滅菌するというシーンもあった。

数曲の演目のなかで、ずば抜けて面白かったのが、たミケル・ウルキーザ（Mikel Urquiza）という若

スペインの作曲家の「さえずる鳥たちとふりかえるフクロウ」という曲。CD やラジオ番組での出会いはおろか、名前さえも聞いたことがなかった作曲家の作品だったのだが、愉悦に溢れた独特の疾走感があり、多彩な音色がきらびやかな光が放射されるようにめまぐるしく移っていく様は、まるで、森の中で数多くの鳥たちのさえずりに誘われて、他の動物たちが次々と繰り出して鳴き声をあげながら駆け回るようで、聴いている自分もうまるでその中の動物の一匹になったかのような、マジカルな浮遊感を感じさせられた。8 分ばかりの作品だったが、波のように現れては消えてという具合に顔を出す調性的な部分では、ラヴェル、ルーセル、レスピーギ、そして R.シュトラウスを思わせるような音色が繰り出されていて、この若い作曲家が高い技術とずば抜けたセンスを持っていることが実感された。今後大注目の若手作曲家、と言えるのかもしれない。

2◆ヒナステラ「ギター・ソナタ」

2021 年は、ここ 20 年ほどをかけて（※）なんとか全作品を聴こうと努めてきた作曲家の一人、アルベルト・ヒナステラ（アルゼンチン、1916-1983）の、ほぼ全作品を聴くに至った—3 作品あるオペラの中の 2 作品だけ、まったく音源がなく聞けないでいる一年となった。その年に、NHKBS の「クラシック倶楽部」で 韓国の人気女性ギタリストであるパク・キュヒがヒナステラのギター・ソナタ（1976）を演奏するのを目することができたのは嬉しい（8 月 17 日、「ラテンの風～古民家に響くギターの調べ～」）。演奏会場はなんと、私の自宅から歩いて 20 分ほどの、横浜市の文化財である古民家「横溝屋敷」。この 20 世紀屈指の名作といえるギター・ソナタは、作曲されてからすでに 45 年経っているものの、調性的でありながらその限界を突き破らんとする意思が横溢し、それが革新的なギター奏法の充填と相まって、聴く者をして慄然たらしめる迫力を失わないままだ。別の演奏者によるものだが（惜しくも 29 歳で交通事故で亡くなった女性ギタリスト Sabrina Vlaskalic による驚異的な演奏）、ぜひ次の動画をご覧になって、ヒナステラの音楽がもつ力に触れてみてほしい。

<https://www.youtube.com/watch?v=7I4Mq7yGGI0>

（※）私はこの文章で「20 年ほど」と述べたが、本当に世の中に「上には上がいる」と思わせられることがあって、次のサイトを見つけた時は、仕事としてはなくひたすら趣味としてここまでの極め方と情報提供（ご自身でのピアノ演奏も含めて）をなさっていることに、心から感服した。まだ一部しか拝見していないが、これから少しずつ読んでいくのが楽しみでならない。

「中南米ピアノ音楽研究所」 <http://pianolatinoamerica.org/index.html>

3◆DHM レーベル『トーマス・ヘンゲルブロック・エディション』（16 枚組）

ずっとその創造の歩みを克明に追っていきたいと思わせる、同時代・同世代の芸術家—そのような人と出会うことは、この上ない幸福だと私は思っている。作家、作曲家、演奏家、画家、建築家……など、広く見渡しても、そのような人は、私にはまだ 10 数名ほどしかいない。2021 年に、「ひょっとしてこの人は」と思わせる指揮者、トーマス・ヘンゲルブロックに出会う年となった。

私の考えでは、素晴らしい指揮者とは単に世に知られた曲を楽団を率いて上手に演奏するだけではなく、世に（あまり）知られざる曲の価値を演奏を通して再認識させ、今の時代に本当にあるべき「音楽

のシーン」とは何かを演奏活動を通して実証していく人でなければならない。古楽アンサンブル「バルタザール＝ノイマン・アンサンブル・合唱団」を創設して、数々の新しい試みに挑戦してきたこの指揮者は、もうすでに長いキャリアを積んでいるが、不覚にも私は、2021年の初めに、シューベルトの交響曲第8番「ザ・グレート」の演奏をラジオでたまたま聴いてその清新さに驚き、初めてその存在に注目することとなった。その後、この16枚組のBOXを買い求め、少しずつ聴いてきた。バッハのミサ曲口短調やハイドンの「天地創造」などの有名曲も入っているが、かなり多くが「知られざる曲」であり、じつに美しい合唱に導かれて、様々なバロック期の音楽を堪能することとなった。

幸いなことに、次の動画（バッハのミサ曲口短調）の動画が公開されているので、この指揮者・演奏家たちの演奏に耳を傾けてみてほしい。

<https://www.megaron.gr/en/event/balthasar-neumann-chor-ensemble-thomas-hengelbrock-live-streaming/>